



櫻井 孝充さん(60M) 株式会社今仙電機製作所 代表取締役社長執行役員

仕事をスムーズに進めるためには まわりの人たちとの信頼関係が大切です



上: 櫻井社長と開発部門で頑張る同窓生の皆さん
左: 自然豊かな場所にある岐阜工場

卒研の厳しさも懐かしい思い出

ものづくりが好きで、設計に興味があった櫻井さんは、機械工学科(当時)を選びました。卒業研究は大橋義夫教授と戸伏壽昭助教授の研究室に入ります。卒業論文のテーマは「一定軸応力と繰返しねじり応力を受ける炭素鋼S15Cの塑性変形」。設備の納入遅れもあり、実験開始が12月になったため、2ヶ月ほどは大学に泊まり込みだったとか。「先生からは何度も論文を書き直すよう言われた記憶がありますが、厳しい指導のおかげもあり、発表時には良い評価をいただいたことを覚えています」。

就職は数社の候補の中から、先生のアドバイスもあって現在の会社を受けることになったと言います。「自動車関係のシートアジャスタなどを手掛けていたので、機械的動作の設計などに関わることができたらという思いがありました」。

新しい設計の仕事にやりがい

入社後は希望通りに設計部に配属され、シートアジャスタの設計に携わるようになった櫻井さん。「今までの手動タイプに代わり、パワーシートアジャスタが世に出るタイミングでした」。当時、自動車メーカーの研究所に入り一緒に設計するゲストエンジニアという制度があり、上司はメーカーの方に詰めていたため、社内の他部署との調整や生産の立ち上げなど、まわりの指導を受けながらもほぼ一人でこなしたと言います。「大変でしたが、仕事を覚えるための早道だったと思います」。

入社3年目には自分がゲストエンジニアとしてメーカーへ出向くこととなります。「自動車開発の全体を見ることができ、とても勉強になりました」。

アメリカでの試練と成功体験

入社13年目の1998年にアメリカに設立した子会社に転勤。現地での設計開発を任せられます。「当時4人いた日本人の中では一番若く、現地では設計という立場でありながら営業、品質、購買的な業務まで全てに関わって仕事しなければならず、最初の1年は大変でした」。そんな櫻井さんを見かねたアメリカ人から「チームで仕事をの上で一番大事なことは何だか分かるか?それはTrust

(信頼関係)だ」と言われたそうです。「自分なりに誰も知らないアメリカで信頼関係を構築するために『約束を守る』『面と向かって話す』ということを大事にしてきたつもりでしたが、アメリカ人には伝わっていなかったと実感。『自分が』という意識を『チームとして』という意識に変えて取り組んでいきました。もちろん英語も頑張りましたよ」。

2005年に帰国するまでの約7年間、家族とともにアメリカで過ごした櫻井さん。「1年目は家族をどこにも連れて行けず、寂しい思いをさせましたが、子どもたちが現地に溶け込んでくれたので助かりました」。

経営側の立場で会社に貢献する

帰国後2年が過ぎ、岐阜工場の工場長として赴任します。「新しい工場で新製品の立ち上げが重なり、課題が山積みの状態でした」。ここでも櫻井さんは「自分が頑張らなければ」と思って苦しんでいたところ、リーマンショックにより生産が3分の1まで減る事態に…。

しかし、「時間的なゆとりができて、皆で課題に向き合うべく係長以上全員が集まって40分間の毎日会議を開くようにしました。経験豊富な課長や係長から出るアイデアを見て反省し、『彼らに任せることが大事』という気持ちになったことで信頼関係もでき、全てが良い方向に向かいました」。

本社の工場長も務め、その後は全国の工場をまとめる役割を担い、製造担当の役員となります。2019年に社長を任せられ、様々な改革に取り組んでいるところだと言います。「現在はシートアジャスタが全体の85%前後を占めていますが、数年前から力を入れてきた電子事業を育て、さらに第3の柱になるような事業を起こし、安定した経営ができるように進めているところです」。

今後、電子系の人材を育てる必要性を感じており、愛工大の後輩たちにも期待を寄せているとか。

若い人たちには、自分が思うことに挑戦してほしいと言います。「答えは一つではないし、間違いがあれば正してくれる人がいるはず。自分なりの意思や意見もち挑戦していく勇気をもってほしいですね」。

電力事業に関わる仕事をする中で 社会的使命とやりがいを感じています

電気への興味から明電舎を志望

「電気の中の強電に興味があったので、電気工学科を選びました」。思い出に残っているのは、雷の研究をされていた宮地殿先生の講義で、「電気はすばらしい」と思ったとか。中でも電気トラブルに関する内容は、仕事で電力会社と付き合い中でも役に立っているそうです。

就職活動は、「当時は複数の企業にエントリーシートを出す形ではなく、1社目で決まらなければ2社目を受けるという学校推薦枠での応募でした。先年度は面接翌日には内定が出ていたのですが、私の場合は面接後1週間経っても通知がなく、ドキドキしながら待ちました」。

知識や経験を生かして営業技術に

入社後、沼津事業所へ配属になり、電力系の保護制御装置を設計する仕事に就きます。技術の進化が目覚ましく設備投資も盛んな時期で、新しい装置の開発が進められていました。「保護制御装置は、事故を検出するために重要な装置ですが、そのデジタル化に向けた開発設計に携わりました。5年間で、電力業界の専門的なことについて色々勉強させてもらいました」。

その後、営業技術職に希望を出して1992年に本社の技術部門(当時は五反田事務所)に移ります。「見積もりから納品まで一貫して携わり、お客様から技術的な要望を受け、設計できる仕様に落とし込み、製品が納期に間に合うよう進めるのが仕事です。社内調整や、お客様との密接なやり取りが必要で、仕事は多岐にわたっていましたが、手応えもありました」。

とくに印象深いのは2003年から3年間にわたる大きな開発プロジェクトです。「分散型保護制御システムの開発にリーダーとして関わりました。電力業界は技術変革期の真っただ中で、当時最先端のデジタル技術やITを駆使したシステムの構築により電力会社の調達コスト削減、業務効率化、信頼性向上に貢献できたと思います」。

マネジメントをする立場で工場へ



変圧器工場での出荷前試験の様子

営業技術職として様々なプロジェクトに関わった炭谷さんですが、2017年に変圧器副工場長として、沼津へ。2018年から現職の工場長となりました。

「工場長は経営者と同じです。生産に関わる中で、利益や人事、設備など全てに目を配る必要があ



炭谷 憲作さん(62E) 株式会社明電舎 変電事業部 変圧器工場長

り、経営の視点と技術の視点の両方が必要ですね」。

部下が作る仕組みをチェックし、コントロールするのが仕事ですが、同時に部下を育てるのも重要な役割だと語ります。日々の仕事を通して部下が能力を高められるよう、サポートしているそうです。「昨今の社内キャリアアップには、マネジメント能力とコミュニケーション能力が必要です。知識を習得するなどインプットには強い人が多い一方、自分の言葉で要領よく簡潔に話すようなアウトプットが苦手な人が多いように見受けられます」。炭谷さんが入社した頃は、お金をかけても良いものを作る時代で、忙しい中でも勉強する時間もあり、成長できるゆとりがありました。「今は効率化が重視される時代で、若い社員は大変だと思います」。

「現在、電気の分野ではEVやパワエレなどが花形ですが、地味ながらインフラに興味を持ち当社へ入社を希望する人もおり、後継者の育成に力を入れています」。

海外の電力事業にも関わる

国内の電力業界は電力流通コスト削減の厳しい状況にあり、いかに高い品質を維持しつつ、低コストなものを提供できるかということで市場競争は激しさを増していると言います。「海外製部品や部材の調達拡大、市場開拓を目指し、2014年にはインドの変圧器製造会社を子会社化し、変圧器事業の維持・拡大に取り組んでいます。現在、シンガポール、インド、マレーシアに海外現地法人があり、沼津工場はそのマザー工場として、指導を兼ねて年に1回は海外に出かけています」。今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で海外出張ができないだけでなく、海外から部品調達が滞るなど事業に影響が出ているとか。国内生産への切り替え、別の部品調達ルートの確保など、忙しい日々を送っていると言います。

「電力供給というインフラに関わる仕事には社会的使命があると自負しています。日本ほど停電時間が短い国はなく、電気の供給信頼度が高いのは我々日本勢のもつ豊富な経験とノウハウに支えられた絶対的な品質にあり、そこに貢献できる今の仕事にはとてもやりがいを感じています」。